

日本国際文化学会第15回全国大会公開シンポジウム

「紛争と融和における文化の役割 — 江戸初期、冷戦期、現代」

基調講演「文化による紛争世界への対抗：カントの『永遠平和の為に』を平戸から読み直す」

平野健一郎（東洋文庫理事）

はじめに

4つのタイム・ポイント

1613年 ジョン・セーリスの平戸来航

1648年 ウェストファリア講和条約

1755年 リスボン大震災

1795年 カント『永遠平和の為に』

カント『永遠平和の為に』の読み方

テキスト：高坂正顕訳『永遠平和の為に』岩波文庫、1949年

cf. 池内紀訳『永遠平和のために』集英社、2007年

読み方① 世界平和思想の頂点 →国際連盟、国際連合

読み方②、③ ウェストファリア講和条約（1648年）→ウェストファリア体制

→カント『永遠平和』 リアリストの読み方 / アイデアリストの読み方

第1章 国家間における永遠平和の為の予備条項

第2章 国家間における永遠平和の為の確定条項

確定条項1：各国家における公民的体制は共和的でなければならない（国家の体制）

確定条項2：国際法は自由な諸国家の連盟の上に基礎をおくべきこと（国際体制）

確定条項3：世界公民法は普遍的な友好の諸条件を原理とすること（訪問権）

「訪問権」（引用文はスライドで）

他国の領土を踏んでも、敵としての取扱いを受けない権利（滞在の権利ではない）

地球表面の共同所有の権利に基づく、互いに友好を結ぶための権利

カント『永遠平和の為に』の新しい読み方

新しい読み方④：純粹理論・構造論的に読む（vs. 従来の読み方①②③：実践論として読む）

「訪問権」の謎を解くカギは、3つの確定条項を組み合わせた構造 + 2つの補助線

ジョン・セーリスの平戸来航（1613年）

Captain John Saris, 1579/80~1643） イギリス東インド会社東洋航海司令官

1613年6月11日 平戸到着 松浦藩主松浦鎮信・隆信の歓迎

8月~11月 駿府・江戸へ（Wm. アダムズ同行）ジェームズ1世と徳川家康の親書交換

11月 平戸にイギリス商館設置 12月5日 平戸発、翌年イギリス帰国

John Saris, *The First Voyage of the English to the Islands of Japan, 1617* (東洋文庫版)

ジェームズ1世と家康の親書交換

通商と国際交流→平和な関係 (カント)

相互に通商貿易を望み、そのための安全と自由を求める相互性、対等性

双務的な最恵国待遇を与え合う平等性

平戸におけるサーリス、イギリス商館員たち

船上から陸上の日常生活へ (訪問から滞在へ)

住民たちとの接触→混住・雑居→国際結婚→混血

⇒平戸: マルティエスニックな国際都市 ⇒「訪問権」行使以上の状態

Mr. Selden's Map of China

リスボン大震災 (1755年)

1755年11月1日 リスボン地震 (M. 8.5~9)

カント「地震原因論」「地震の歴史と博物誌」「地震再考」(1756年1月、2月、4月)

人類の意志に反する自然の摂理→不和を通じて和合を将来させる合目的性 (カント)

まとめ: 国際文化論にとってのカント『永遠平和の為に』の意義

新しい読み方④ (純粹理論・構造論的に読む) で「訪問権」の謎を解く

カント『永遠平和』確定条項の構造:

1: 国家論 (=構成主体論) 2: 国際体制論 (=全体論) 3: 訪問権 (=個に関する議論)

i.e., 全体—構成物—元素、3層の重層構造

「訪問権」引用の続き (スライド)

海洋と沙漠も船舶と駱駝で越えて、人々は相互に接近、交通は可能→遠い大陸間でも平和な  
関係→法的に結ばれ、世界公民的体制に近寄ることができる

「訪問権」は永遠平和理論の核心、国際文化的な概念

多文化主義者としてのカント

鎖国を賢明な政策と評価

言語と宗教の相違→民族を分離→文化の向上、より大なる合致⇒平和の理解へ

国際文化研究者の課題

「訪問権」と「滞在権」の境目? 多文化主義と立憲主義の関連は?

カント『永遠平和』をメタ理論として、国際文化研究を発展させる



「文化多様性 (cultural diversity)」という規範／文化をめぐる動向

飯笹佐代子 (青山学院大学)

### 1. 「多文化主義 (multiculturalism)」批判とは

スケープゴート化される多文化主義

「闘う概念」としての multiculturalism (ハーマツハ、2007)

### 2. ユネスコと「文化多様性」

自由貿易と文化をめぐるアメリカ vs フランス・欧州の攻防

「文化特例」から「文化多様性」へ

→ 「文化多様性に関する世界宣言」(2000年)

「文化多様性条約 (文化的表現の多様性と保護及び促進に関する条約)」(2005)

\*採択過程におけるカナダ、ケベック州の積極的なイニシアチブと外交の展開

### 3. ケベックのインターカルチュラリズム (*interculturalisme*)

カナダ連邦政府の multiculturalism への対抗概念としての *interculturalisme*

「妥当なる調整 (*accommodements raisonnables*)」の試み

チャールズ・テイラー、ジェラルド・ブシャールらの政策へのコミット

結び

多文化主義やインターカルチュラリズムの経験や実績というソフトパワーを活用した、  
「多文化外交」の可能性・・・?

2008  
政治的対立  
intercultural



主な参考文献・資料

・飯笹佐代子「多文化共生という無難な安全地帯」伊豫谷登士翁編『移動という経験』有信堂、2013年

(学大) 飯笹佐代子「多文化社会ケベック、共存への模索 - 『妥当なる調整』をめぐる論争」『ケベック研究』(日本ケベック学会) 創刊号、2009年

・久保庭慧「ユネスコ活動における文化多様性概念の展開—その多面的把握に向けて」『法学新法』120巻、9-10号、pp. 237-260

・西川長夫「招待講演差異とアイデンティティのための闘争の先に見えてくるもの—タゴールの反ナショナリズム論とイリイチの「ヴァナキュラーな価値」を手がかりに」『生存学研究報告』4、2011年、pp. 309-326.

・ハーマツハ、ヴェルナー (増田靖彦訳)『他自律—多文化主義批判のために』月曜社、2007年

・藤野一夫「「文化多様性」をめぐるポリティクスとアポリア—マイノリティの文化権と文化多様性条約の背景」『文化経済学』第5巻3号、2007年、pp.7-13

・Bouchard, Gérard *L'Interculturalisme: Un point de vue québécois*, Montréal: Boréal, 2013

・Bouchard, Gérard et Charles Taylor, *Fonder l'avenir: Le temps de la conciliation*, Gouvernement du Québec, 2008. (G. ブシャール・C. テイラー編 (竹中豊・飯笹佐代子・矢頭典枝 訳)『多文化社会ケベックの挑戦—文化的差異に関する調和の実践 ブシャール=テイラー報告』明石書店、2011年)

・Rattansi, Ali, *Multiculturalism: A Very Short Introduction*, New York: Oxford University Press, 2011

・Smith, Rachael Craufurd, 'The UNESCO Convention on the Protection and Promotion of the Diversity of Cultural Expressions: Building a New World Information and Communication Order', *International Journal of Communication* 1, 2007, 24-55

UNESCO、ケベック州政府の公式ウェブサイト、ほか

「冷戦と文化(交流)」

2016年7月16日

早稲田大学 田中孝彦

I. 序説

(1) 冷戦史研究における文化研究の隆盛(cultural turn) — 冷戦文化と文化冷戦

(2) 問題の所在

- ① 冷戦史に文化(交流)をどう位置づけるか — 「冷戦」と「文化」のとらえ方
- ② 対立関係の変容と文化(交流) — 文化が「冷戦」をどう変えたか
- ③ 研究上の課題 — 概念・実証性

II. 冷戦史に文化(交流)をどう位置づけるか

(1) Global Historical System としての冷戦

① 米ソ(東西)地政学的対立史観の限界 — 冷戦史の矮小化

- ・ 政府間関係重視、社会(間関係)の軽視

② Global System としての冷戦

- ・ 「国家(政府) vs. 社会(市民)」の重視 — 「冷戦コンセンサス」
- ・ 社会文化から政府間/国家間関係への影響を重視
- ・ 周辺重視 — 従属変数としての周辺から独立変数としての周辺へ

③ Historical System としての冷戦 — 動態的分析の必要性

- ・ 歴史的に変容し終焉するシステム
- ・ 冷戦システムを維持する文化と改編する文化との相克としての変容過程

III. 冷戦システムの変容と文化(交流)

(1) 「冷戦の起源」= 冷戦システム形成の端緒と形成の完了

- ① 「善悪二元論的友敵認識」— 官製「敵」イメージとそれを受容する文化的要因
- ② イデオロギー的対立ゆえの「社会 vs. 社会」— 闘争の武器としての文化交流
- ③ 同盟内における「文化浸透」(齋藤)と権力システム(北村) — 文化摩擦の素地

(2) 「冷戦の変容」(Détente) = 冷戦システムの成立と衰退(60年代中葉~70年代中葉)

- ① キューバ危機('62)とJFKの「平和の戦略」演説('63)
  - ・ 冷戦の武器としての文化交流→相互理解のための梃子としての文化交流
  - ・ From 'dichotomy' to 'dialectic'?

② 「1968年問題」— Counter Culture, Post-modern? (Suri)

- ・ ベトナム→学生暴動→冷戦コンセンサスの動揺→デタントの緊要性↑

③ Rock'n Roll と東欧・ソ連 — 'How the Beatles Rocked the Kremlin' (BBC)

- ・ 東側青年層の潜在的反共産主義・反冷戦体制の心理→80年代の中心的世代?

④ 「近代」の移植 vs. 土着性 — 中ソ対立、アフリカ etc.



- (3) 「冷戦の終焉」 = 冷戦システムの終焉(不可逆的逸脱)
- ① 冷戦コンセンサスの修復失敗(「新冷戦」)
  - ② 反核文化のグローバル化? — 「ユーロシマ」と反核運動
    - ・ 容核文化から反核・非核文化へ?
  - ③ Gorbachev Factor (Brown)
    - ・ 文化交流世代 Gorbachev の新思考 — Openness
    - ・ 文化交流世代と Gorbachev の側近
  - ④ 東欧市民革命の文化的要因
    - ・ 西側生活様式のインパクト
      - 東欧の土着文化(教会等) vs. 共産主義文化
  - ⑤ 東西間の文化的均質化または弁証法的止揚?
    - ・ Post-Materialism — Environmentalism (Inglehart)
    - ・ Mass Consumption Society (Rosenburg)
- (4) 通底する文化要因 — 浸食要因としての「知的共同体」

#### IV. むすびと課題

##### (1) 冷戦と文化(交流)

- ① 既存文化と冷戦文化と反冷戦文化の相互作用
- ② 文化交流の逆説—闘争から融和の道具へ
- ③ 土着文化と文化浸透としてのイデオロギー — 陣営浸食の要因
- ④ 冷戦の終焉の文化的意味 — 「勝敗」「寛容」「和解」?

##### (2) 文化交流・浸透とカント

- ① 「訪問権」の世界と「滞在権」の global society
- ② 冷戦のインプリケーション — 文化浸透・文化摩擦・止揚

##### (3) 研究の課題

- ① 概念的問題 — 文化の定義と categorization
  - ・ 「なんでも文化」問題
  - ・ 状況としての文化と活動領域としての文化 — 区分と相関性
  - ・ 誰の「文化」か — 政策決定者? 市民? 内なる多様性の問題
    - 戦略文化、安全保障文化、etc.
- ② Evidence の問題
  - ・ 状況または構造としての文化をどう検証するか?
  - ・ Intellectual history か Socio-political history か? — Mass data の必要性
- ③ 理論的課題 — Constructivism との接点。Lebow, *A Cultural Theory of International Relations*.

## 主要参考文献

### [英語文献]

- Brown, Archie (1996) *The Gorbachev Factor*, Oxford University Press.
- Caute, David (2005) *The Dancer Defects: The Struggle for Cultural Supremacy during the Cold War*, Oxford University Press.
- Evangelista, Matthew (1999) *Unarmed Forces: The Transnational Movement to End the Cold War*, Cornell University Press.
- Ferguson, Yale and Rey Koslowski (2000) 'Culture, International Relations Theory, and Cold War History' in Odd Arne Westad (ed.) *Reviewing the Cold War: Approaches, Interpretations, Theory*, Frank Cass, Chapter 7.
- Immerman, Richard and Goedde Petra (eds.) *The Oxford Handbook of the Cold War*, Oxford University Press.
- Kalinovsky, Artemy and Craig Daigle (eds.) (2014) *The Routledge Handbook of the Cold War*, Routledge.
- Kuznick, Peter, J. and James Gilbert (eds.) (2010) *Rethinking Cold War Culture*, Smithsonian Books.
- Lebow, Richard Ned (2008) *A Cultural Theory of International Relations*, Cambridge University Press.
- Leffler, Melvyn, and O. A. Westad (eds.) (2010) *The Cambridge History of the Cold War, volumes I, II, and III*, Cambridge University Press.
- Major, Patrick and Rana Mitter (2004) 'East is East and West is West? Towards a Comparative Socio-Cultural History of the Cold War', in Mitter and Major (eds.) *Across the Blocks: Cold War Cultural and Social History*, Frank Cass.
- Reynolds, David (2006) 'International History, the Cultural Turn and the Diplomatic Twitch' *Cultural and Social History*, 3: 75-91.
- Richmond, Yale (2003) *Cultural Exchange and the Cold War: Raising the Iron Curtain*, Penn State University Press.
- Richmond, Yale (2008) *Practicing Public Diplomacy: A Cold War Odyssey*, Berghahn Books.
- Saunders, Frances Stonor (2001) *The Cultural Cold War: The CIA and the World of Arts and Letters*, New Press.
- Suri, Jeremi (2005) *Power and Protest: Global Revolution and the Rise of Détente*, Harvard University Press.
- Westad, Odd Arne (2005) *The Global Cold War: Third World Interventions and the Making of Our Times*, Cambridge University Press.
- Whitfield, Stephen (1996) *The Culture of the Cold War*, The Johns Hopkins University Press.



[邦語/邦訳文献]

カント・エマニュエル著 (1795) 『永遠平和のために』宇都宮芳明訳、岩波文庫。

ゴルバチョフ・ミハイル著 (1995) 『ゴルバチョフ回想録 下巻』工藤精一郎・鈴木康雄訳、新潮社。

ゴルバチョフ・ミハイル著 (1987) 『ペレストロイカ』田中直毅訳、講談社。

北村洋著 (2014) 『敗戦とハリウッド—占領下日本の文化再建』名古屋大学出版会。

齋藤嘉臣著 (2013) 『文化浸透の冷戦史: イギリスのプロパガンダと演劇性』勁草書房。

田中孝彦 (2001) 「冷戦史研究の再検討—グローバル・ヒストリーの構築に向けて」一橋大学法学部創立 50 周年記念論集刊行会編『変動期における法と国際関係』有斐閣、所収。

田中孝彦 (2009) 「グローバル・ヒストリー—その分析視座と冷戦史研究へのインプリケーション」日本国際政治学会編『日本の国際政治学 第 4 巻 歴史の中の国際政治』有斐閣、所収。

平野健一郎著 (2000) 『国際文化論』東京大学出版会。

益田実、池田亮、青野利彦他編 (2015) 『冷戦史を問いなおす—「冷戦」と「非冷戦」の境界』ミネルヴァ書房。

渡辺愛子 (2003) 「イギリスによる対ソ連文化外交戦略 1955-1959—ブリティッシュ・カウンシルを中心に」『国際政治』134: 121-135。

渡辺靖著 (2015) 『<文化>を捉え直す—カルチュラル・セキュリティの発想』岩波新書。



## 紛争と宥和における文化の役割-

### 東ティモールにおける非暴力の思想「ナヘビティ」を事例に

福武慎太郎（上智大学）

#### 1. 人類学における「文化」：ローカルな価値体系としての文化

##### (1) 対立する文化

- ・人類学の思想としての文化相対主義/異文化（他者）理解を通じた人種・民族間の宥和
- ・ローカルな価値と対立する自文化中心主義/グローバルな価値（ex. 人権）

##### (2) 宥和のための文化：共同体の和解プロセス

- ・慣習法に基づく紛争処理/和解儀礼→Alternative justice、ADR(Alternative Dispute Resolution、

裁判外紛争処理)/下からの和解（草の根の和解実践）vs 上からの和解（平和構築）

- ・真実和解委員会による国民和解

#### 2. 東ティモールにおける国民和解プロセスと非暴力の思想「ナヘビティ」

- ・「敷物に座る」の意/内戦期(1975年)と住民投票後の騒乱(1999年)に広まった宥和への呼びかけ ⇨NGO、市民社会からの批判

##### (1) インドネシアと親インドネシア派の裁きを求める NGO と市民社会

国連によるインドネシアと親インドネシア派の人権侵害の調査/刑事訴追と特別人権法廷/ほとんどが無罪判決/国際法廷の設置を求める市民運動

##### (2) 自己の過ちを認め宥和を求める独立派

受容真実和解委員会の真相究明プログラム/独立派、親インドネシア派問わず全ての人権侵害が対象/明らかになった独立派による暴力、略奪行為

#### 3. 「つなぐ」文化と「切断する」文化

「つなぐ」。分断された共同体をつなぐ価値としてのナヘビティ/解決すべき問題をどのように理解するのかというプロセス

「切断する」。グローバルな市民社会との断絶を生むローカルな価値としてのナヘビティ

福武慎太郎(2007)「国民和解を想像する-東ティモールにおける過去の人権侵害の裁きをめぐる二つのローカルティ」幡谷則子/下川雅嗣編『貧困・開発・紛争-グローバル/ローカルの相互作用』上智大学出版、91-117頁。

辰巳慎太郎(2014)「東ティモールにおける非暴力の思想<ナヘビティ>」小田博志/関雄二編『平和の人類学』49-69頁。